



# SDGs



特集

COVID19

## 「SDGs」実現への 取り組みとは？

～ 学校と企業などの活動より～

特集 2

### トップアスリートの集中力

スポーツ庁長官

室伏広治さんに聞く

職人が直しやすいように作業をする」と職人さん達は言うそうです。「時空を超えて存在するものがあることにロマンを感じます。SDGsも地球を次の世代に繋げるということですよ」と高橋さん。

## ワークインライフで美しく稼ぐ

高橋さんは、高校生にキャリア選択について話す機会には、「生きるの中に働くがある」と伝えています。和えるの社員は副業・複業を行ってもよく、各人が起業家的な働き方をしているのだそうです。香川からフルリモートで勤務している人もいるなど、働く場所は問いません。高橋さんも、東京、奈良、仙台の3拠点生活だそうです。さらに、給与も自分・会社・社会にとって幸せな三方よしの金額を自己申告して決定。

「現代は幸せの尺度がたくさんあります。自分でしっかりとキャリアを描いて、一つの会社に頼らず、“生きる”と“働く”を“和えて”いくために、何が必要なかを考えていくことがより求められます。」(高橋さん)

“0歳からの伝統ブランドaeru”は出産祝いとして贈られることが多いそうですが、生まれてきた赤ちゃんだけではなく、親にも伝統を伝える二重の意味を持っています。首都圏の店舗、東京「aeru meguro」では、実際に商品を手にとって購入できるだけでなく、伝統を体感できるイベントなども不定期で開催しています。



### 跡見学園のスタディツアー

跡見学園の中学3年生(当時)30名が、SDGs/社会問題スタディツアーで東京「aeru meguro」を訪ねた(2021年3月)。商品を手に取りながら、社会問題の「理想状態」「課題」「解決策」を考えることに取り組んだ。「私たちが、伝統工芸についての情報を深く知り、他の人に伝承してもらえるよう役割を果たす」という解決策を書いた生徒もいた。



「伝統=変わらないこと」ではなく、むしろ「革新の連続」であると高橋さん。明珍本舗(兵庫県姫路市)では、もともと甲冑を作っていたが、時代の変化に合わせて、茶道で使われる火箸を作り、茶道人口が減少した今では火箸の音を楽しむという使用方法を暮し手に提案している。明珍火箸は和えるがプロデュースするホテルの部屋に瞑想の道具として置かれている。

P.11・12写真提供:和える

## ビビハドトカダブ

## SDGsをキーワードに

## 名建築を見る

上野公園(東京都台東区)は、美術館や博物館などが歩いていける距離に集まっており、実は世界的にも珍しいエリアです。その中の9つの文化施設が6歳以上の子どもを対象とした「Museum Start あいうえの」というプロジェクトを運営しています。プロジェクトの推進メンバー、東京都美術館学芸員の熊谷香寿美さん、東京藝術大学特任助教小牟田悠介さんに、プロジェクトの狙い、ミュージアムの可能性をお聞きしました。

### すべての子どもに ミュージアム体験を

「Museum Start あいうえの(以下「あいうえの」)」は、「すべての子どもにミュージアム体験を!」をミッションとしたプロジェクトです。「ミュージアムにあるホンモノをよく見て、自ら考え、発見する」ミュージアムを活用した探究型の学びが目指されています。プログラムには、「ファミリー&ティーンズ・プログラム」、「学校プログラム」、多様な家庭状況や文化背景をもつ子どもたちを対象とした「ダイバーシティ・プログラム」と3つのカテゴリーがあります。

プログラムに参加した子どもには、9つの文化施設の情報が掲載されたガイドブック「ビビハドトカダブック」と「冒険ノート」が入った特製ツール「ミュージアム・スタート・パック」がプレゼントされます。プログラムに参加した後もミュージアムを楽しむためのツールです。「冒険ノート」にはミュージアムで発見したことや不思議に思ったことを書き込んだり、チラシを切り貼りしたりしてミュージアムでの発見や体験をまとめます。また、各ミュージアムで呪文<sup>\*</sup>を唱えると、各施設の特徴がイラストに描かれたオリジナルバッジをもらうことができます。バッジのかわいらしさに思わず取材の立場を忘れてテンションが上がってしまいます。さらに、自分がまとめた「冒険ノート」を「あいうえの」ウェブサイトに掲載し発信することもできます。「ミュージアム・スタート・パック」について、

熊谷さんは「こどもたちが自走しながらミュージアムを活用していくためのツール」と表現します。プログラムという1回の特別な体験を提供するのではなく、こどもたちが主体的かつ継続的に学びを続けていくための環境を用意していることをよく示す言葉です。

※ 呪文：9館(国立西洋美術館、東京都美術館、上野の森美術館、東京国立博物館、恩賜上野動物園、国立国会図書館国際子ども図書館、国立科学博物館、東京藝術大学、東京文化会館)の館種の頭文字をつなげた「ビビハドトカダブ」

## SDGsをキーワードに 100年残したいもの考える

今回は「ファミリー＆ティーンズ・プログラム」のひとつ「SDGsで探究！名建築をみる」というプログラムの様子を取材しました。このプログラムは、SDGsをキーワードに美術館を探究するプログラムです。近代建築の巨匠・前川國男が設計した東京都美術館内をグループに分かれて散策しながら、観察力を磨くことがねらいです。前川國男は「建築は長持ちしないといけないよ。100年とはたせないといけない」という言葉を残しました。こどもたちは、前川がこだわった建物を長く使い続けるための素材や家具などをじっくり観察しつつ、自分が100年後に残したい場所、風景を探検しながら見つけていきます。最後にはそれぞれの発見を全体でシェアしました。

## こどもたちの学びのパートナー “とびラー”

「あいうえの」のプログラムの中でこどもたちと共に活動し、重要な役割を担うのが、アート・コミュニケータ(愛称とびラー)です。“とびラー”は、東京都美術館と東京藝術大学の連携事業「とびらプロジェクト」で活動する18歳以上の大人たち。親でも先生でもない、ひとりの大人である“とびラー”がこどもたちにフラットに関わり、活動に伴走することが、「あいうえの」の大きな特徴です。

“とびラー”がこどもの活動に寄り添うことについて、小牟田さんはこのように説明します。“とびラー”がこどもたちに伴走する時には、“きく”ということを大切にしています。こどもたちの言葉を丁寧にすくいあげ否定せず受け止める。自分が肯定される場で、自分のことをきいてくれる人がいることで、こどもたちは安心して自分の発見を言葉にすることができるのです



### 「SDGsで探究！名建築をみる」

まず、「Museum Start あいうえの」プログラムオフィサーの山崎日希(東京藝術大学特任助手)さんから、SDGsを切り口に、前川國男が設計した美術館建築を観察するポイントを聞く。とびラーと自己紹介を終えたら、さあ、探検にスタート!

写真：中島佑輔



### 館内探検中

とびラーと一緒に館内を散策し前川國男のこだわりを発見。「椅子の脚は継ぎ足してある?」「壁に穴が空いてる!」「階段が三角形になってる」。不思議に思ったことや気がついたことをとびラーに伝える。最初に会ったときの堅さがすっかり消えて、言葉が飛び交う。



保護者のためにミュージアム体験のポイントを伝える時間も。「出かける前に、こども自身が行きたいと思う気持ちを作ることが大切。」「行き先を決めるには、『あいうえの』のウェブサイトにあるミュージアムカレンダーを使うと便利。」「ミュージアムでは、全てを見ようとしなくて大丈夫。こどもがふと立ち止まった作品だけでも、こどもの気づきを受け止めながらじっくり見てみると、思わぬ発見と一緒に楽しめます」

右列写真下3点提供：「あいうえの」

## 創造的にミュージアムを楽しむ

小牟田さんは、プログラムに参加する保護者の中には、「ミュージアムには連れて行きたいのだけれど、何かハードルを感じて困っている人が多いように感じる」といいます。そういう方には、「最初から最後まで全部見たり、親という立場を演じて答えを探したりしなくても良いので、こどもと一緒に親も楽しみましょう」と伝えるそうです。

ミュージアムというと、何か正解があり、それについて専門家から教えてもらう場と考えがちですが、「作品を見て自分が何を感じたのか、何を捉えたのか。対話を通じて言葉にしていくことで、大人もこどももアートや文化財の価値づくりに関わっていけるとよいと思います」と熊谷さんに言われて、ハッとしました。熊谷さんはこう続けます。「ミュージアムは、作品の保存ももちろん大切ですが、多様な人々の理解をつみ重ね、その価値を作っていく活動も大きな役割です。「あいうえの」は、こうした創造的な学びの場を作りたいと考えています」

## 日本で唯一の

## ユニバーサルシアター

## CINEMA Chupki TABATA

JR 田端駅から徒歩5分。駅下仲町通り商店街の中程に、座席数20ほどの小さな映画館、CINEMA Chupki TABATA (シネマ・チュプキ・タバタ。以下チュプキ)があります。ここは、視覚や聴覚に障がいのある人、子育て中の人、車いすが必要な人・・・、さまざまな理由で映画館に行くことを諦めている人たちも「映画館で」映画を楽しめる、日本で唯一のユニバーサルシアターです。

## 「今、話題になっている映画を見たい」

チュプキ代表の平塚千穂子さんは、20代の一時期、映画館で過ごすことで救われた経験があります。やがて映画館で働くようになり、チャップリンの『街の灯』を目が見えない人に伝えようというグループの活動に参加。人生が動き出しました。

まずは当事者にリサーチすべく、視覚障がい者の方達に会いに行くことに。その頃の気持ちを、「目が見えない人に、見て楽しむ映画とか写真、絵画などを持ち出すこと自体が失礼なことなんじゃないかと思っていた」と振り返ります。ところが、「映画を見るのは諦めていた。テレビドラマの副音声みたいに視覚を補うような工夫があったら映画を楽しめると思う」「今、映画館で上映している、話題作を見たいんだ」という声が平塚さんの背中を押しました。当時(2000年)、アメリカには『スターウォーズ』や『タイタニック』のような作品を公開初日から視覚や聴覚に障がいのある人も楽しめる劇場がすでに100館以上あることに驚き、2001年にボランティア団体「City Lights」を設立して、視覚に障がいのある人と一緒に映画を楽しむ音声ガイドに特化して活動をスタートしたのです。

初めは映画館で視覚障がい者と隣合わせに座り小声で解説する、というやり方もしたと言います。徐々に音声ガイドの仕組みも作り、上映会や映画祭を続けていくうちに、「いつかは、自分たちの小屋(映画館)を持ちたい」と考えるようになったそうです。「夢貯金」を始め6年くらい経った頃、初代劇場を持つことができましたが、映画館としては頓挫。地域の子育てサロンとして場所貸しするという失敗もありましたが、ここで子育て中の人と出会いがなければ、今のチュプキも違う形だったかもしれません。

## どんな鑑賞スタイルも保証するのが ユニバーサルシアター

田端に物件が見つかり、今度こそ映画館を開業するぞと勢いこんだ平塚さんを待っていたのは資金不足。しかし、開業への一途な思いは強く、資金集めが始まりました。これまで繋がっていたボランティア団体の支援者からの募金や、繋がりのなかった映画ファンへの宣伝も兼ねたクラウドファンディングなど、とても多くの方の支援がありました。

常設の、誰でも入れる映画館を作るにあたり平塚さんが大切だと考えたのは、映画目当てで来てみたら、横に盲導犬を連れて人がいてイヤフォンをつけて映画を見ている、そんな、これまで知らなかったことを知ることが、ユニバーサルシアターなら起こせるということです。

視覚障がいのある人や音が聞こえにくい人のため音声ガイドがあるだけでなく、聴覚障がいのある人が楽しめるよう邦画にも字幕を付ける、小さな子どもを連れて人のための防音の親子鑑賞室を作る、車いすの人もスクリーンを見上げて首が痛くならないようなスペースを用意する・・・。みんなが安心して楽しめる誰も排除しない映画館にしようという構想がどんどん広がってユニバーサルシアター、チュプキがオープンしました。